世界を知る
～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆さんのご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

「元気いっぱい！ラオスの視覚障がい者の方々」

シニア海外ボランティア　藤原 正教 さん
（平成 24 年９月～平成 26 年９月 ラオス派遣　職種：障がい者スポーツ）

ສະບາຍດີ!（サバーイディー／ラオス語で「こんにちは」）。

私は、JICA(国際協力機構)のシニア海外ボランティアの現職参加隊員として、ラオスの教育スポーツ省に派遣されました。そこで障がい者スポーツ推進課とパラリンピック委員会の職員として、様々な障がい者のみなさんと共に過ごすことができました。今日は、その中でも、特に関わりが深かった視覚障がい者の方々のことを紹介します。

まず、ラオスの視覚障がい者の現状についてです。

ラオスの人口は現在約 650 万人。視覚障がい者の数は現在約１万３千人とのことで、約 0.2％の方が該当します。先天的な視覚障がいに加え、地雷や不発弾により視力を失う場合も少なくありません。私が働いたのはラオス唯一の盲学校で、首都ビエンチャン特別市にあり、先生 4 名、小学生から大学生までの視覚障害を持った生徒さん約 30 名が在籍しています。ここの生徒数が 30 名ほどですから、学校に通うことのできない視覚障がい者がまだたくさんいることは容易に想像できます。

それから、日本では考えられないことですが、ラオスでは盲学校の先生もほとんどの方が全盲や弱視です。生徒達のほとんどは、盲学校がある保健省リハビリセンター敷地内の宿舎で生活をし、小学生は主に盲学校で学びますが、中学生以上は近隣の学校に通っています。残念なことに、まだラオス政府には障がい者のための道路環境整備や、特別支援教育を充実させるための財政的余裕がありません。彼らは特別支援教員などなしに授業を受け、登下校時は車の往来が激しい道路の脇を、弱視生徒が全盲生徒の歩行をサポートして通っています。また、盲学校の先生方も大変です。日本のような障がい者年金制度がないことに加え、ラオスでは公務員給与が数カ月遅れることも珍しくないので、勤務後にマッサージの仕事をしたりして収入を得ておられます（公務員の副業は特に規制されていません）。

しかし、そのような厳しい環境の中でも、いつも笑顔で、仕事や勉強、スポーツにひたむきに取り組む姿はとても輝いていました。

その中に、唯一国際試合に参加している”ゴールボール”という競技があります。アイマスクを着用し、鈴の入った重いゴム製のボールを転がして、相手ゴールを狙うというものです。適切な指導ができるラオス人コーチがいなかったので、未経験者ながら私がコーチを担当しました。インターネットの情報や映像資料で研究したり、これまで培ったスポーツ指導経験を活かしながら指導しました。同時に、英語の国際競技規則をラオス語に翻訳する作業も進め、私の帰国後に備えました。

昨年ミャンマーで開催された ASEAN - PARAGAME（アセアン障がい者大会）には、予算の都合で女子チームのみの出場でしたが、銀メダルを獲得することができました。このように国際大会でも好成績を残しているゴールボールですが、国の慢性的な財政難から思うように選手を派遣できないのが現在の悩みです。

最後に、私と視覚障がい者の方々のもう一つの繋がりについてお話します。盲学校の先生方は日本文化や言語に関心が高く、日本語学習にも非常に熱心でした。生徒の中にも日本語学習経験者がおり、更に学習を進めてもらうよう日本語教室を開催しました。実は、”日本語教師”は私の定年後の目標だったのですが、43 歳で達成できたことは嬉しい経験となりました。先生方や生徒達とも仲が良く、休日には互いの家に遊びに行ったりしました。一緒に祭りに出かけたり、お祝い事に呼んでいただいたりと、とても楽しく幸せな日々を過ごすことができました。またラオスに戻りたいと思う今日この頃です。

ゴールボールチームとの筋トレの様子
（右から２番目が筆者）